

2025年度 自己点検・評価報告書

国際教養学部評価分科会

2026年2月

基準4 教育課程・学習成果

1. 学修に関するもの

学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。また、学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① 学修成果の測定方法

EMP (English Medium Program) を展開する本学部では、学修成果を次の3点から測定している。

1. 主要科目における Reflection Sheet と Rubric の運用
2. BEVI を用いた異文化理解力の確認
3. TOEFL iBT 等の外部試験による英語力の測定

以下に、本学部が行っている自己点検・評価の具体的取組を記す。

1. 主要科目における Reflection Sheet と Rubric の活用

1年次春学期に提供する初年次セミナー（科目名：Freshman Seminar）では、「自立した学習者」としての学びを自覚するため、授業開始時・中間期・終了時の三段階で Reflection Sheet を作成する仕組みを設けている。

- 開始時：授業の到達目標、履修理由、自身の目標、目標達成に向けて挑戦したいこと等を明確化する。
- 中間期：講義で扱った取組を点検し、当初の目標に対する達成度を根拠とともに振り返る機会を設ける。
- 終了時：振り返りに基づき、新たな課題（挑戦目標）とその取組方針を明示する。

併せて Rubric を用い、学びへの計画性、大学生としての自覚、学習者としての自覚、新たな仲間づくりの各観点から、履修開始時と終了時のデータに基づく変化を確認し、当該科目履修を通じた成長の有無を把握する。同様の仕組みを Academic Writing および Junior Paper においても実施している。

2. BEVI による異文化理解力の確認

BEVI は、異文化態度に関連する「Sociocultural Openness」「Global Resonance」「Ecological Resonance」等17のプロセス尺度と、回答の一貫性・適合性を確認する妥当性尺度を備え、単一指標に依存しない立体的評価を可能とする。大学2年次秋学期の International Fieldwork I では1学期間の事前学習を実施し、International Fieldwork II において実地研修を行う。プログラム前 (Time 1) / 後 (Time 2) のグループ平均やデシル分析等により学習介入の効果を統計的に示すレポート（出力例あり）が生成され、これを活用して異文化理解力の変容を把握する。

3. TOEFL iBT 等の試験による英語力の測定

本学部は学部開設時より、TOEFL iBT 80点を卒業要件として設定している。この基準は、本学部の教育目的である「高度な英語運用能力を備え、国際社会で活躍できる人材の育成」を客観的に担保するものである。TOEFL iBT はリーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4技能を国際的基準に基づき総合評価する試験であり、80点は学術的活動や専門的コミュニケーションに必要な十分な英語力を示す水準である。この要件を明示することで、学生は入学当初から到達目標を明確に認識し、計画的に学修を進めることができる。加えて、在学中の複数回受験により英語力の伸長を数値で把握でき、教員側も学年進行やプログラム参加の効果を測定・分析できる。以上により、TOEFL iBT スコアは本学部における学修成果の客観的かつ信頼性の高い指標として機能している。

【改善計画】

1. 主要科目における Reflection Sheet と Rubric の運用：

Freshman Seminar の実践内容を学部教授会で共有し、可能な範囲で他授業への応用を促す。

2. BEVI を活用した異文化理解力の確認：

現行の運用に加え、2026年度カリキュラムで導入予定の GCF I/GCF II における導入を検討する。

3. TOEFL iBT 等の試験による英語力の測定：2026年度カリキュラム導入に際し、学部開設時より運用してきた英語卒業要件の見直し。

② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導 等）

【自己点検・評価の方針】

- シラバス：
大学所定のフォーマットに基づき、授業概要・到達目標・学修到達目標（LOs）との関係を明確に示している。履修者はこれを踏まえて履修登録を行っている。
- 授業形態：
本学部は学年あたりの学生数が約 90 名と少人数であるため、専門科目の履修人数も適正規模に保たれ、アクティブ・ラーニングやディスカッションを基盤とする授業展開が容易である。
- 履修計画の指導：
学期開始時のオリエンテーションにおいて、初年次・2年次を対象に学部理念・教育目標・3ポリシーを確認した上で、カリキュラム・ツリーを説明する。具体的には、〈人文科学・社会学〉〈政治・国際関係〉〈経済・ビジネス〉の3分野において、200番台の入門科目から各分野1科目4単位以上を履修し、300～400番台でも各分野から1科目4単位以上を履修することで、人文・社会科学の幅広い学術知識を論理的かつ批判的に理解できるようにする。

【改善計画】

- シラバス：
特になし。
- 授業形態：
来年度からの新カリキュラムで導入する Global Citizenship Fieldwork I（海外短期研修）および Global Citizenship Fieldwork II（国内短期研修）の事前学習として、1年次春・秋学期に提供する Cross-Cultural Understanding、Introduction to Data Science、Foundations of Data Science、Academic Foundations、English for Academic Purposes、Freshman Seminar II を相互に連動させ、学びの一貫性を高める。
- 履修計画の指導：
オリエンテーションに加え、1～2年次の Academic Advisor による個別面談の場で履修計画の相談機会を確保する。

【2】今年度の自己点検・評価結果

① 学修成果の測定方法

1. 主要科目における Reflection Sheet と Rubric の活用

1年次春学期に提供する初年次セミナー（科目名：Freshman Seminar）では、「自立した学習者」としての学びを自覚するため、授業開始時・中間期・終了時の3段階で Reflection Sheet を作成する仕組みを設け実施した。同様の仕組みを Academic Writing においても実施した。

2. BEVI による異文化理解力の確認

International Fieldwork II においてプログラム前（Time 1）／後（Time 2）のグループ平均やデシル分析等により学習介入の効果を統計的に測る試みを行なった。

3. TOEFL iBT 等の試験による英語力の測定

本学部は学部開設時より、TOEFL iBT 80点を卒業要件として設定してきたが、TOEFL80未達で卒業延期・内定辞退が発生。日本人FILAで4年終了時にiBT80未達が25.0%（2019年入学）→37.1%（2020年入学）→33.8%（2021年入学）という状況が常態化している。また受験料負担（iBT約29,000円）と複数回受験のコスト増や、メンタル面の負荷（不安・抑うつ等）で就活や履修に影響があがった。学部では第6回Extra Ordinary教授会を開催し、外部試験（TOEFL）を“前半の進級・留学・上級科目”に使用し、卒業判定は内部評価へ移行する提案を行なった。Phase 1（1-2年次：TOEFLで門を作る）こととした。具体的には留学（専門科目履修型）の最低要件：TOEFL iBT 61、2年次開始（4月）までに提出（未達は語学研修型へ）。3年次春学期から始めるSeminar Iの履修要件としてTOEFL iBT 70を必須とした。Phase 2（3-4年次）では卒業判定はSenior PaperをCEFR準拠ルーブリックで共通評価し、口頭試問（defense）＋ゼミ教員以外のレビュアーを付けて質保証とした。これにより卒業率改善、費用負担軽減による不安低減し、早期にiBT70まで到達させつつ、後半2年は「英語で学術的に学ぶ」ことに集中させる。また2026年度の追加支援策としてTOEFL iBT70未達者向

けの EAP III (1 単位) を開講することとした。また TOEFLiBT100 以上を目指す層には、非常勤による特別講座やオンライン活用も検討することとした。

② 効果的な教育を行うための工夫 (シラバス、授業形態、履修計画の指導 等)

シラバス

2026 年度用に新規開講される科目について新規のシラバス作成が行われた。

● Career Design for FILA

国際教養学部のカリキュラムの最初学期に配置された 1 単位の必修科目として、FILA での学びを、学生一人ひとりの具体的で発展可能なキャリア計画へと接続することを目的とする。FILA が掲げる「地球市民」の理念-世界、地域規模の課題に対し、知恵・勇気・慈悲をもって向き合う-に基づき、本科目では、本学部で学ぶ目的意識の明確化と併せて、国際教養学部卒業後に世界や様々な地域や分野で活躍する先輩方の生の声 (学部時代の体験や現在の挑戦) から学ぶこぶことを通じて、FILA 生としての強みを活かした自分のキャリア目的を考える機会を提供する。

● Freshman Seminar II

新カリキュラムで導入する Global Citizenship Fieldwork I (海外短期研修) および Global Citizenship Fieldwork II (国内短期研修) の事前学習として、1 年次秋学期に提供する Freshman Seminar II で 5 名の教員が担当して実施することが決定した。

授業形態

文部科学省 2024 年度「全国学生調査 (第 4 回試行実施) ポジティブリスト」で、国際教養学部は、学部分野別で以下の項目においてトップ 3 以内にランクインした。国際教養学部の徹底した英語教育、海外留学の必修化、少人数ゼミ教育をはじめ、「世界標準」のグローバル教育が高く評価された。

ランキング項目 順位

Q11: 海外留学・海外研修 (短期も含む)	第 1 位
Q12: 主に英語で行われる授業の履修 (語学科目を除く)	第 1 位
Q18: 外国語を使う力	第 1 位
Q7: グループワークやディスカッションの機会	第 2 位
Q8: 質疑応答など、教員等との意見交換の機会	第 3 位
Q21: 他者と協働する力	第 3 位

どの科目が具体的に、こうした評価に貢献したか確認はできないが、教授会では本結果について情報を共有し、今後も継続的に各教員が教育に従事していくことを確認した。

履修計画の指導

オリエンテーションに加え、1~2 年次の Academic Advisor による個別面談の場で履修計画の相談機会を確保した。

2. 教育課程に関するもの

教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

- 2026 年度カリキュラムにおける科目ナンバリング、DP、LOs との照らし合わせ
自己点検・評価の方針
- **ナンバリング体系**は、学修レベル (100~400) および専修分野<人文科学・社会学><教育・心理学 (2026 年度開設予定)><政治・国際関係><経済・ビジネス>の 4 つの各分野、また科目群ごとに分類済。学部のディプロマ・ポリシー (DP) に定められた学修成果 (LOs: Learning Outcomes) が、開講科目と適切に対応しているかを検証する。

- 各科目シラバスに L0s 対応項目 (L01~L04 等) を明示し、到達目標を可視化。全科目に付与されているナンバリング (水準・分野コード) を基に、カリキュラム全体の体系的・段階性を確認し、学年進行に沿って L0 と DP 達成が可能なかを評価する。
- 成績評価は GPA 分析および成績分布 (A~F) で集計し、L0s 項目別に学修成果を把握。科目別成績分布と DP 項目の到達度を照合し、成果が低い分野・水準について教育改善策を検討する。

改善計画

- **DP 項目と科目成果のマッピング精度向上**
全科目のシラバスにおける DP, L0s 対応の妥当性を再確認し、分析しやすい形に整理。
- **ナンバリング運用の強化**
入門 (100 番台) → 中級 (200 番台) → 上級 (300~400 番台) の体系的履修を促すため、履修ガイドや面談で学生に提示。
DP 未達成リスクのある履修パターンを早期発見し、学習計画を修正。
- **成績データの DP 対応分析**
DP 項目ごとに、該当科目の平均 GPA・成績分布を集計。
DP 到達度が相対的に低い領域には、補助教材・アクティブラーニング強化などの改善策を導入。
- **定期的フィードバックの仕組み化**
年度末の自己点検報告書に、DP 達成度と科目・成績の照合結果を明記。
教務委員会・FD で共有し、翌年度のシラバス作成やカリキュラム改訂に反映。
- **新カリキュラムに対応したわかりやすい履修要項の作成**
新カリキュラムでは、新たなナンバリングや、専修制など新規の情報を全般的な改訂をすすめる必要があり、分かりやすさと正確さを意識した履修要項の情報をまとめる。

【2】今年度の自己点検・評価結果

ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

- 2026 年度カリキュラムにおける科目ナンバリング、DP, L0s との照らし合わせを行なった。
- ナンバリング体系は、学部のディプロマ・ポリシー (DP) に定められた学修成果 (L0s: Learning Outcomes) が、開講科目と適切に対応しているかを検証した。
- 各科目シラバスに L0s 対応項目 (L01~L04 等) を明示し、到達目標を可視化。全科目に付与されているナンバリング (水準・分野コード) を基に、カリキュラム全体の体系的・段階性を確認し、学年進行に沿って L0 と DP 達成が可能なかを評価した。
- ナンバリング運用の強化を教務課と協議し、新カリキュラムでは入門 (100 番台) → 中級 (200 番台) → 上級 (300~400 番台) の体系的履修を促した。
- 成績データの DP 対応分析は現状できていない。
- 定期的フィードバックの仕組み化は現状できていない。
- 新カリキュラムに対応したわかりやすい履修要項の作成を行なった。

3. 就学状況

【1】2025 年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① 学籍異動の状況 (卒業、休学、退学の状況など)

自己点検・評価の方針

国際教養学部における学籍異動の状況 (2020~2024 年度入学者) の資料を分析すると以下のような特徴があげられる。

1. 卒業状況

- 4 年卒業 (48 か月) の割合は 2020 年度入学者で約 35% (24 人)、2021 年度で約 44% (36 人)。
- 延長卒業 (54 か月・60 か月) は 2020 年度入学者に見られ、54 か月 2 人、60 か月 24 人と比較的多い。2020 年度入学者は、学部必須の留学がコロナの影響でオンライン留学となったため、追加で交換留学に参加し、5 年卒業をする学生が多くなったことが一因である。

- 2020年度はコロナ禍の影響が大きく、標準年限での卒業率は低下し、延長卒業が目立つ。2021年度は4年卒業率がやや改善している。

2. 休学状況

- 休学者割合は2020年度で約13%（3人）、2021年度で約15%（12人）。
- 2022年度以降の入学者では5～3%台に低下。

傾向

コロナ禍の初期に入学した学年（2020・2021年度）は休学率が高い。
2023年度以降は留学制度再開などにより、休学理由の構造が変化している可能性。

3. 退学状況

- 退学者は2020年度で6人（約8.7%）、2021年度で10人（約12.2%）と高め。
- 2022年度以降は5人前後に減少。
- 2024年度入学者では1人。

傾向

初期2学年はコロナ・オンライン授業・海外渡航制限によるモチベーション低下や進路変更が影響した可能性が高い。

直近入学者では退学率は低下傾向。

4. 転学部・転学科

- 2020年度は1人、2021年度も1人のみで、大きな動きはなし。

5. 全体傾向のまとめ

1. 2020～2021年度入学者
 - コロナ禍直撃世代で、延長卒業・休学・退学の割合が高い。
2. 2022年度以降
 - 卒業データは未確定だが、休学・退学は減少傾向。
3. 標準卒業率改善の兆し
 - 2021年度入学者では4年卒業率が回復しつつある。

改善計画

リスク層の早期把握の必要性

退学・休学に至る前段階でのアカデミックアドバイジング強化が効果的と考えられる。

【2】今年度の自己点検・評価結果

① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

自己点検・評価結果

1. 卒業点検・評価結果

- 2026年2月16日時点で、4年卒業（48か月）の割合は2022年度入学生で42.3%（30人）、2021年度で約44%（36人）であった
- 延長卒業（54か月・60か月）は2021年度入学者で15名、2020年度入学者で6名である。かつての60か月24人と比較的多かった時と比べると、少なくなったと言える。
- コロナ禍の時期と比べると、6年卒の学生の数は減少したが、英語の卒業要件を満たすことができず卒業できない学生も今だ存在している。

2. 休学点検・評価結果

休学者割合は2022年度で73人中21人と多い。その多くの理由は海外留学を前提としている学生が多い。これにより卒業時期の調整が休学のもっとも主要な理由となっている。しかしその一方で、経済的事情10名、一身上27名、病気3名などが記録されており、学生それぞれ事情があることが認識できた。

3. 退学点検・評価結果

2025年4月から2026年2月までに5名の退学者がいた。理由は経済的事情1名、勉学意欲の低下1名、学費未納1名、進路変更2名となっている。人数は昨年と同数であった。

4. 転学部・転学科点検・評価結果

2026年度転学部転学科試験では、2024年入学生が3名（法学部1名、文学部1名）、2022年入学生が1名（文学部）に転学した。昨年は、2020年入学生が1人、2021年入学生も1人だったので、人数

としては増加。英語での学部の学びに困難を感じている学生については早い時期に、そうした判断をすることが重要であると感じる。

【改善計画の点検・評価】

リスク層の早期把握の必要性

退学・休学に至る前段階でのアカデミックアドバイザー強化が効果的と考えられるが、具体的な対策は講じることはできないでいる。

4. 改善計画

【3】 今年度の点検・評価に基づいた改善計画

教育課程に関するもの

教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

新規開講科目の確認と調整

新規導入科目の効果について担当教員、学生アンケート等を活用して確認し必要に応じてシラバスの調整等を行う。

対象科目

- Global Citizenship Fieldwork I (GCFI:海外短期研修)
- Global Citizenship Fieldwork II (GCFII:国内短期研修)
- Freshman Seminar II (必修2単位のGCFIとGCFIIの事前学習科目)
- Career Design for FILA (必修1単位の卒業生を招いたFILA独自キャリアデザイン科目)
- Global Career Design for FILA (選択科目 1単位 国際機関等での活躍を目指した学生を対象とした科目)

特にGCFIとGCFIIについては、短期研修先と内容について精査し、必要に応じて大胆に研修内容を変える。

英語能力も担保したSenior Paperの単位認定のためのRubricの作成

- 2025: 教授会で議論、Senior Paperルーブリック作成、FDの開催、学生周知
- 2026: 2026カリキュラム学生から導入
- 2027: 継続的に制度評価

英語の卒業要件を下げるのではなく、Diploma Policyに沿った人材の育成という点を堅持し、内外ともに評価を、むしろあげていくためのインセンティブをどのように構築していくかが重要となる。

新ポートフォリオの活用

学習ポートフォリオワーキンググループが提案した2026年4月リリース予定の新しいポートフォリオを導入し以下のタイミングで記入機会を設定し、学びの振り返りができるようにする。

- Global Citizenship Fieldwork I-II (全員対象: 1年春休みに行う海外・国内短期研修)
1. GCF I-II 目標設定: 1年秋学期の始め
 2. GCF I-II 振り返り: 研修終了後(2月下旬)
- 1セメスター必須留学(日本人学生のみ対象: 2年秋学期に留学)
3. 1S 留学目標設定: 2年春学期の終わり
 4. 1S 留学振り返り: 留学終了後(2年秋学期終了後)
- 国内短期研修(留学生のみ対象: 3年夏休み)
5. 目標設定: 3年春学期の終わり
 6. 振り返り: 研修終了後(3年夏休み)
- Senior Paper(全員対象: 3年春のゼミから開始で、4年春に提出)
7. SP目標設定: 3年春学期の始め
 8. SP目標の見直し&振り返り: 3年秋学期終わり
 9. SP最終振り返り: 提出後(4年春学期終了後)

学生の主体的な活用を促し、入力義務のある機会だけ触れることにならないようにするためには、日常的にポートフォリオにアクセスする機会を意図的に仕掛ける必要がある。システム側の仕掛けとしては、履修登録時期にポートフォリオへの目標設定入力を促す画面表示をしたり、成績発表時期に成績を見る前にポートフォリオで振り返りを促すような画面表示をしたりする。

<中長期計画（アセスメント実施後 3～5 年の期間で取り組む改善計画）>

2030 年に行うカリキュラム改訂に向けて、学部執行部が必要とされる修正をかけて改善していく。

基準 5 学生の受け入れ

1. 学生の受け入れのための広報活動全般について、適切に実施しているか。

- ・ オープンキャンパスにおける取組み
- ・ 授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

課題となった事項

1. 外国人学生の入学希望者増加に向けた戦略的な募集の実施

創価大学で学ぶ留学生の出身国データを基に、現地の組織や教育機関と連携しながら、継続的な留学生獲得のためのアピール活動を強化する。特に重点国においては、国際課と学部教職員が横断的に情報を共有し、効果的な計画を策定・実施する体制を整備する必要がある。

2. 学部改組に合わせた持続的な留学生増加のための戦略策定と実施

- 偏差値向上と定員配分の見直し
- 海外卒業生組織との連携強化
- 重点地域における現地高校での学部啓蒙
- 国内インターナショナルスクールへのプロモーション
- 日本語学校との連携強化

【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

オンライン学部説明会の実施

大学のオープンキャンパスに合わせ、学部事務室による定期的なオンライン学部説明会を実施した。HP を通じてコンサルテーションの日程告知や予約受付を行い、許可を得た上で実際の参加者の画像を掲載することで、受験生の関心を高める工夫を行った。本年度は、毎月 1 回の説明会に加え、オープンキャンパス時にもオンライン学部説明会を実施し、受験生との接点を拡大した。

入学手続きを行う外国人学生の歩留まり確保のための取り組み

学部事務室を主体とし、合格者の入学確定率を向上させるために、オンライン入学前オリエンテーションを実施した。

海外での創価大学説明会への参加と広報の推進

国際課が主催するインドとマレーシアでの創価大学説明会に国際教養学部として参加し、インドに小田事務長、マレーシアに杉本学部長が参加し、学部の説明と、個別相談に参加した。

【日本人学生への対応】

国際教養学部（日本語版）ホームページの充実

学部事務室の継続的な取り組みにより、「留学日記」（1 セメスター留学の体験記）、「Why SOKA FILA?」（学生の声）、「お母さん、ありがとう」（親に贈るメッセージ）、「卒業生インタビュー」といったコンテンツをシリーズ化し、HP を通じた情報発信を強化した。

大学映像企画および聖教新聞での在学生・卒業生の紹介

学部の教育成果を広く発信するため、大学映像企画において、ゼミ生の活躍を紹介、聖教新聞を通じて、在学生・卒業生の取り組みを紹介した。2025 年 1 月には、2026 年度のカリキュラムをテーマとしたショートムービーを制作し、外国人教員も参加した。

関西創価高校への独自説明会の実施

関西創価高校の1～3年生を対象に、FILA在生によるオンライン先輩セッションを実施し、学部の学びや海外留学制度について説明した。

学部教員の講義内容の公開

アドミッションセンターの協力のもと、FILAの教員2名（マクドナルド教授、吉江准教授）が、大学での学びを紹介する講義を提供した。また、第51回夏季大学講座では杉本学部長が「経済成長」に関する講義を実施した。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

東京・関西の創価学園生との連携強化

姉妹校から創価大学訪問と、体験授業の提供はあるが、継続的な連携をとる仕組みを構築していきたい。

海外の高校との連携強化

マレーシアのSISM、Delhi Public Schoolからの優秀な学生の確保と拡大を目指していきたい。インドネシアのGandhi Memorial Intercontinental School (GMSIS)等との連携を結んでいきたい。ムスリム学生に対応したハード・ソフト面の環境整備も重要である。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

偏差値上昇を通じた学部評価と水準の上昇

留学生の増加に伴い、日本人入学者の割合が相対的に減少した場合、偏差値の上昇が期待できる。そのことによって、国際教養学部がこれまで構築してきた学生による高い評価に加え、客観的な評価を確立し、結果として学部の水準の上昇へとつながる流れを構築したい。

留学生の増加には、学士・修士5年一貫教育の体制が新カリキュラムの導入で実施し、日本語×英語×幅広い学×専門性といった強みを養成できることをしっかりアピールしていく必要がある。

2. 合格者に対する入学前教育等を適切に実施しているか。また入学後の学生に必要な支援（リメディアル教育・初年次教育等）を実施しているか。

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

留学生合格者への入学前日本語教育に関する教材の共有

【課題】

- 留学生の日本語習得レベルのばらつきがあり、入学後の学習環境に適応するまでに時間を要するケースが見られる。
- 入学前の日本語学習環境の整備が十分でなく、教材の統一性や提供方法に改善の余地がある。

【改善計画】

- **入学前日本語教育用教材の統一およびオンライン提供の拡充**
 - 学部で推奨する教材を明確にし、合格者に入学前学習用として提供。
 - 教材内容の日本語レベル別整理を行い、学習進度に応じた活用を可能にする。
- **在学生（日本人学生・留学生）とのオンライン学習サポートの実施**
 - 入学前の段階から、在学生が学習支援を行うシステムを導入し実践的な会話練習の機会を提供。

2. 入試形態に合わせた入学前教育の整備と拡充

【課題】

- 入試形態（書類審査、面接等）によって入学者の準備状況に差がある。
- 合格後の学習準備に関する情報提供が一律ではなく、入学時点での学習格差が発生する可能性がある。

【改善計画】

- **入試形態ごとの事前学習ガイドラインの作成**
 - 入試形態（一般選抜、推薦入試、留学生特別選抜等）ごとに必要な学習項目を明示したガイドラインを策定し、合格者に提供。

- 英語力、日本語力、基礎教養科目（社会科学・人文科学）の事前学習項目を整理し、入学後の学習ギャップを最小限に抑える。

総括

2025年度は、入学前教育の充実、入試形態に応じた学習準備の整備を重点課題として取り組む。これにより、新入生の学習定着率向上および留学生の学習支援体制の強化を図り、より円滑な学習環境を提供することを目指す。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

改善計画に対する点検・評価結果

留学生合格者への入学前日本語教育に関する教材の共有

【改善計画の点検・評価】

- 学部で推奨する教材を明確にし、合格者に入学前学習用として提供をした。

2. 入試形態に合わせた入学前教育の整備と拡充

【改善計画の点検・評価】

- 入試形態ごとの事前学習ガイドラインの作成
- 入試形態（一般選抜、推薦入試、留学生特別選抜等）ごとに必要な学習項目を明示したガイドラインを策定し、合格者に提供。
- 英語力、日本語力、基礎教養科目（社会科学・人文科学）の事前学習項目を整理し、入学後の学習ギャップを最小限に抑える。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

日本語学習歴や、出身国（漢字圏、非漢字圏）を考慮した、カスタマイズした事前教材の提供。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

創価学園生で、国際教養学部への推薦を希望する学生の数名には、二年次もしくは三年次の夏休みに独自の短期研修の機会を設けて、入学後に高いレベルで挑戦できる基盤形成を行えるようにしたい。

学生の意見聴取

主として以下の観点を参考に、今年度の点検・評価および今後の方針を記入してください。

- 履修、授業、LOs に関すること
 - ・ 全学の教育目標や3つのポリシーを認識していたか
 - ・ 履修科目を決める際に、その科目のラーニング・アウトカムズを意識したか
 - ・ 自身の学びを自己点検しているか
(履修科目のラーニング・アウトカムズの修得や、授業アンケートの自己評価について)
 - ・ 今後、DPに掲げる能力を身に付けることが期待できるか
- 昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について
 - ・ 学生からの意見を受けて検討および実施した取り組み等のフィードバック
- 学生生活全般に関することや機構として意見交換した事項

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

2024年度の自己点検・評価を通じて明らかになった課題に対し、2025年度は以下の方針に基づき、具体的な改善計画を実施する。

1. ラーニング・アウトカムズの周知

【課題】

- 学生が自身の学習成果（ラーニング・アウトカムズ）を十分に理解し、学習計画に活用する機会が不足している。

【改善計画】

- シラバスおよびオリエンテーションにおいてラーニング・アウトカムズの明確化

- 各科目のシラバスに、学習成果の目標を具体的に記載し、学生が自身の学びの進捗を可視化できるようにする。
- 入学時オリエンテーションやガイダンスにおいて、ラーニング・アウトカムズの説明を強化し、学生の理解を促進する。

2. 大学院進学希望者への対応

【課題】

- 大学院進学に関する情報提供やサポートが十分ではない。

【改善計画】

- **大学院進学に関する個別相談窓口の設置**
 - キャリアセンターおよび学部事務室が連携し、留学生の大学院進学希望者向けに、個別相談窓口を設置。
 - 進学に関する必要書類の準備、推薦状の依頼方法、スケジュール調整のアドバイスを提供。
- **大学院進学に関するワークショップの開催**
 - 国内外の大学院進学を目指す学生向けに、申請プロセス、奨学金情報、研究計画書の書き方に関するセミナーを実施。
 - 9月入学者が不利益を被らないよう、スケジュール調整のポイントを明確化。

3. 留学生の生活・学習状況の把握

【課題】

- 留学生の生活・学習環境について、個別のニーズに対応できるサポート体制が十分に確立されていない。
- 生活面や学習面での課題があっても、適切な支援を受ける機会が限定的である。

【改善計画】

- **定期的なアンケート調査の実施**
 - 学期ごとに留学生を対象とした生活・学習状況に関するアンケートを実施し、現状を可視化。
 - 結果を分析し、必要なサポート策を学部内で検討・実施する。
- **個別面談の強化**
 - 留学生アドバイザーを設置し、定期的に個別面談を実施。
 - 学習サポート、生活サポートの相談窓口を明確にし、必要な支援を迅速に提供。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価

1. ラーニング・アウトカムズの周知

【改善計画の点検・評価】

- **シラバスおよびオリエンテーションにおいてラーニング・アウトカムズの明確化**
 - 各科目のシラバスに、学習成果の目標を具体的に記載し、学生が自身の学びの進捗を可視化できるようにした。
 - 入学時オリエンテーションやガイダンスにおいて、ラーニング・アウトカムズの説明を強化し、学生の理解を促した。

2. 大学院進学希望者への対応

【改善計画の点検・評価】

- 大学院進学に関する個別相談窓口の設置には着手できなかった。
- 進学に関する必要書類の準備、推薦状の依頼方法、スケジュール調整のアドバイスは、基本的にゼミ担当教員が個別に対応するに止まった。
- **大学院進学に関するワークショップの開催**
 - 国内外の大学院進学を目指す学生向けに、セミナーを実施した。

3. 留学生の生活・学習状況の把握

【改善計画の点検・評価】

- **定期的なアンケート調査の実施**
 - 学部事務室が、留学生との個別面談を実施し、生活・学習状況に関する状況を丁寧に確認し、適宜学部執行部に共有してくれた。

○ 定例学部執行部会で、必要に応じて留学生の状況を共有し、対応した。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>
定期的な学生自治会組織との協議会の実施

現役生・卒業生間の連携の推進

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>
2030年の新カリキュラム改訂に向け、学生の多様なニーズに向けて意見を聴取・反映を試みる。